

元トップアスリートの転機についての語り

豊田則成¹⁾ 松田 保²⁾

A Narrative Study of the Experiences of Turning Points in a Former Top Athlete

Norishige TOYODA / Tamotsu MATSUDA

Abstract

The purpose of this study was to analyze the features of the experiences of turning-points by using the narrative approach. The informant was a former top athlete who was playing football. A Semi-structured interview was conducted with him, regarding the following, 1) beginning to play football, 2) the awareness of self as a top-player, 3) the experience as a member of a top team, 4) the experience of converting his playing position, 5) the experiences of sport injury, and 6) the experience of career transition in athletic retirement. The results suggested that a former top athlete narrated about his turning points with some plots of one's autonomous action for various environmental factors. Making one's life story (autobiography) may be a useful method for understanding one's inner fact through one's experiences.

Key words : A Former Top Athlete, Turning Points, Narrative, Interview, Informant

1) 生涯スポーツ学科
2) 競技スポーツ学科

はじめに

われわれは、数え切れないほどの思い出を持っている。その内容は個人によって異なるにせよ、その人の人生を彩る大切なものである。そして、個人がこれまでに経験してきたことについての様々な日常記憶 (everyday memory) は、時に、今ある状況の中で再構成され、語られる。その語りの中のプロット (plot: 筋) には、自己の一貫性や斉一性の一端が見え隠れし、物語的アイデンティティ (narrative identity) を生きる個人の内面を読み取ることができる (榎本, 1999)。

本研究の関心事は、元トップアスリートがこれまでの歩みの中で体験した様々な転機をどのように語るのか、ということにある。そもそも転機 (turning point) は、個人の人生における意味あるライフイベント (life event) を契機に、多かれ少なかれ生活構造 (life-structure) の転換を個人に迫る (レビンソン, 1992)。それを危機 (crisis) と認知するか否かは、個人の生育暦が大きく関与している。アスリートの場合、競技を始めたきっかけとなった出来事、全国大会出場や日本代表選抜、オリンピック出場やメダル獲得、プロ転身などのスポーツキャリアを強化するものもあれば、怪我や病気、移籍体験、競技引退、セカンドキャリア開発などのスポーツキャリアからの移行を促すものもある。そして、これらの転機を通過することによって、人格的な成熟を期待することができる (杉浦, 2001; 豊田, 1999)。

豊田 (2001) は、アスリートの競技引退を研究テーマとし、これに関連する心理的問題と対策についてアイデンティティ再体制化 (identity reconfirmation) の観点からアプローチしている。競技引退をどのように体験し、そして、それがセカンドキャリア開発にどのように影響するのか、といった課題に取り組む上で、アスリートが現役時代をどのように過ごしたのかを検討することは必要不可欠な

課題といえる。そして、そこではアスリートとして様々な転機をどのように通過し、直面する危機に対してその経験をどのように生かしていったのかといった観点から検討することが大きな意味を持つ。

ところで、本研究は、質的データとしての語り (narrative) に着目している。ここでいう質的データとしての語りとは、数字の体系で取り扱うことのできない広義の言語体系で記述される個性記述的データあり、その分析では対象を反復可能なものとしてではなく、個性的・一回的に扱う。そして、1対1形式で導き出される語りは、その場所で、その両者に限って生起するものであり、本研究の立場は、その個別的な特殊性に徹することで、普遍性や一般化へ向かおうとする。これに関連して、やまだ (2000) は、質的データから新しい変数を発見することが質的研究の醍醐味としている。ただし、質的研究の難しさは拭い去れない。もし少数事例から導き出される仮説が特異なはずれ値としてのみ扱われるとすれば、該当事例をただ単に描写しているのみに過ぎない。加えて、研究者個人の主観的で、恣意的な解釈が許されるべきでもない。質的分析を進める上で生じる解釈の歪みは、質的データの代表性や客観性を確保するために、必ず是正されなければならない。これらの問題をクリアしていくためには、やはり研究者自身が多くの語り体験を繰り返して、その中で獲得した解釈的枠組みをより一層洗練していかねばならないだろう。

自己を物語る行為そのものは、経験を組織化 (organization of experience) し、意味の行為 (act of meaning) を促す (やまだ, 2000; 榎本, 2002)。従って、個人が語る自己物語 (life story) は、必ずしも真実とは限らない。それは、クロノロジカルな時間とは異なり、逆行したり、回帰したり、循環したり、止まったり、様々な流れ方を受け入れる。他方、語られる過去は現在と常に照合されて、絶えず再編成され変容していくため、過去を

想起することが過去をそのまま引き出すことにはならない。本来、過去の体験を忠実に再生することの方が特殊なことといえるのではないか。すなわち、このような形で生成される自己物語は、いわば個人の意味 (meaning) を含んだ内的事実 (inner fact) であり、これを了解的に解釈していくことが個人の内面に接近する上で有効な方法となる。

また、自己を物語る場合を想定すると、自己に関する記憶の問題を無視する訳にはいかない。佐藤 (1998) は、個人の自伝的記憶 (autobiographical memory) は、自己 (self) が大きく関わっているとし、その機能として、

自己の同一性の維持、将来の類似した事態に備えたレシピとしての参照、行動の動機づけ、自我の確認や強化、を確認している。しかしながら、自伝的記憶の再構成的想起 (reconstructive remembering) の機能については、何一つ明らかにされていない (高橋, 2000)。そのようなことを踏まえると、語り直し (re-telling) は、単なる繰り返しもなければ模倣でもなく、新たな自己を再編成していくといった内的作業を読み取る有益な視点を提供してくれる (森岡, 2002)。

本研究は、仮説検証というよりはむしろ仮説生成の立場を採る。具体的に言えば、インフォーマント (情報提供者) から得られたインタビュー資料を基に仮説を導き出していく作業が中心となる。従って、本研究の目的は、元トップアスリートの転機についての語りについてのどのような特徴があるのかを明らかにすることにある。

方法

本インフォーマントを選択した理由

インフォーマントの“経験知” インフォーマントは、元日本代表アスリート1名 (競技継続25年: プロ経歴11年: 競技引退後約1年経過) である。彼は、国際Aマッチ出場経験が豊富なことから、まさにトップアスリートと呼びに相応しい。日本代表チームや

プロサッカーチームの主将を数多く経験し、様々な指導者の采配の下、常に主力選手として活躍するなど、日本スポーツ界を牽引してきた立役者的存在といえる。インタビューの実施には現役引退を経て約1年が経過しており、彼はいわゆる第二の人生の構築を目指し、積極的な生活を送っていた。この間、マスメディアでの解説者、コメンテーターとしての経験も豊富で、インタビュアーからの問い掛けに対し雄弁に語ることは充分期待できた。

インタビューを実現させた“背景” 本研究は、日本サッカー協会U6キッズ・プロモーションの研究活動の一環として実施された。インフォーマントはその協力者であり、アドバイザーとしての立場にある。インタビューはプロモーション・イベントの直前 (2時間半前) に実施され、特に、6歳以下の子どもたちへ向けて有益なメッセージを取り上げるように配慮されたが、インフォーマント自身が様々な転機をいかに乗り越えてきたのが中心的なトピックとなった。

インタビューの“場”の設定 インタビューは、著者の個人研究室で行われ、来客用のソファに腰掛けて、1対1形式で行われた。そこでは、途中来室ができぬよう配慮され、インタビュアーの質問に対してインフォーマントが熟考でき、語りやすい雰囲気を作り出すよう努めた。また、インタビュアーはインフォーマントから様々なトピックについての情報を聞き出すことを重視した。特に、インフォーマントからの自発的な語りを豊かに引き出すために、アスリートとしての自己の自覚や認識について尋ね、インタビュアーが理解できる内容を確認し、理解できない内容については「具体的にはどういうことですか?」といった明細化を求め、聞き直した。

インタビューの手続き

1対1形式の半構造化されたインタビュー (約1時間) を実施した。インタビュー内容は、家族の構成、アスリートとしての自分、

転機となる出来事、将来の展望、などが含まれていた。まず、はじめに本調査の趣旨を説明し、予め研究として公表することを前提とした承諾を得た上で、インフォーマントとインタビュアーの会話内容をICレコーダーに収録した。

インタビュー資料の提示と結果と考察の記述

収録した会話の内容を逐語に書き起こし、インタビュー資料とした。そして、本論掲載に際しては、個人のプライバシー保護に配慮し、インフォーマントの語りの特徴を捉える上で支障を来さない程度に一部加筆を行った。ちなみに、各tableのInt (Interviewerの略) はインタビュアーである著者を、Inf (Informantの略) はインフォーマントを指しており、これらに付随する()の中の番号は、両者の語りの時間的経過に対応している。そして、これを結果と考察の中では示した。また、語りの中の「...」は、発話の中にみられる小休止を表している。

ところで、以下の結果と考察の記述には、著者の主観的解釈が大きな影響を及ぼすことは避けがたい。したがって、著者の解釈を読者にも再解釈することが可能となるように、できる限りオリジナルに近いデータを提示している。加えて、各冒頭にはインタビュアーの質問意図を示した。ちなみに、この作業を経て検証されるのは、著者の枠組みの中での見解の妥当性であり、異なる枠組みを仮定する見解までもを請け負うことはできない。すなわち、著者の主観を関与させることによって獲得することのできる意味を記述しているに過ぎない。

結果と考察

本研究では、単一のインフォーマントから得られた転機に関する語りの中で、以下の6つのテーマに注目する。つまり、それは、1) サッカーを始めたきっかけ、2) サッカー選手としての自分、3) 日本代表チームへの選

抜、4) ポジション・コンバートとライバルの存在、5) 怪我の経験、6) 競技引退、である。また、tableの語りの中で特に注目すべき内容については、アンダーラインを施した。

1) サッカーを始めたきっかけ

サッカーを始めたきっかけについて尋ねることは、サッカー選手としてのアイデンティティ形成の根幹を確認する上で重要な意味を持つと考えられた (Table 1)。

ここでは、兄の影響やサッカーが盛んな土地柄 Inf (025)、サッカーで有名だった叔父 Inf (025)、サッカーの盛んな小学校 Inf (026) など、インフォーマントを取り巻く環境がサッカーに傾倒できる条件を整えていたことを語り、それを「運に恵まれていた」 Inf (026) としていた。その一方で、「その名門の中で...サッカーするのがワクワクしたし...」 Inf (027) というフレーズから、その環境に主体的に関わっていったことが読み取ることができた。

2) サッカー選手としての自分

引退した後、サッカー選手としての自分を振り返り、どのような選手であったのかを語ることは、インフォーマントの現在の自己のあり方を確認する上でも重要な意味を有すると考えられた (Table 2)。

ここでは、「人との出会い」 Inf (032) が大きな所産となっていると語られた。そして、「節目節目でいい指導者にめぐり会えた」ことを、「それも運だと思う」と語った Inf (032)。特に、「...知らず知らずのうちにそうなったり...そういうよう方向付けられたりっていうか...たまたま...その周りの人からそういうアドバイスがあったりとか...」 Inf (032) というように、インフォーマントの良き指導者との出会いが偶然かのごとく語られたことが強く印象づけられた。

Table 1 : サッカーを始めたきっかけについての語り

Int (025): (サッカーを) 始めたきっかけは?
Inf (025): <u>そうですね...最初は...2番目の兄と一緒に少年団の練習に行っただけです。地元がサッカー盛んだったので...野球っていうよりは...周りはサッカーっていうような...まあ...そういう土地柄だったので。あと...自分の...親父は野球をしていたんですけど...若い頃は。でも...親父の弟は...男が3人いて。そのうち3人ともがサッカーをしていたりして。それで...二番下の弟はバリバリで...全国高校選手権なんかでも活躍して... (日本代表高校) 選抜(チーム)にも行ったりするぐらいで...結構名前とかは...その当時とかは...結構全国的に有名だったんですけども。まあ、そういう関係もあったのかどうかはわからないですけども、はい。それで...まあ...サッカーって感じてましたね。はい。</u>
Int (026): いつごろになりますか、サッカーを始められたのは?
Inf (026): <u>いやね。正式にはじめたのは小学校3年生くらいなんですけれども、ただ...もう小学校1年生くらいのころから...休み時間のまあ校庭では...もうすでにみんなはサッカーやっていたんですよ。まあ...学年上の人とかが...一年生のときとかは6年生の人とかが給食を配るのを手伝ってくれたりしていたんですけど...みんな休み時間になると...みんな一緒になってサッカーとかして遊んでくれたりして。2クラスくらいしかない小さな小学校でしたけれども。だから...サッカーばっかりっていう感じてましたね...はい。それで(小学校の)横に中学校もあったので。それで、その中学校もサッカーが強く...そのまま持ち上がりで中学校に行っていたので。そういう部分もあったのかなって思いますけど。</u>
Int (027): サッカーやるには...環境が整っていた感じですかね?
Inf (027): <u>そうですね。それもまた...すごい強い小学校と中学校だったので。はい。その地域でサッカーはすごく名門がたくさんありましたから。その名門の中で...サッカーをするのはワクワクしたし...今から思うと、ホントに恵まれていたなって思います。</u>

Table 2 : サッカー選手としての自分についての語り

Int (031): サッカー選手としての自分はどんな感じだったんでしょう?
Inf (031): <u>やっぱり...運に恵まれていたかなっていうのはありますね。</u>
Int (032): 運に恵まれていた?
Inf (032): <u>あとは...人との出会っていか...指導者の方を含めて...その節目節目でそういう...いい指導者の人に出会ったっていうのもすごく...、それも運だと思うんですけども。そういう人生だったのかなって思いますけどね。それは...知らず知らずのうちにそうなり...そういうように方向付けられたりっていうか...たまたま...その周りの人からそういうアドバイスがあったりとか...そういう部分で...まあ...、結果論かもしれないんですけど。今から思うとそういうのがよかったかなと思うんですね。はい。</u>

3) 日本代表チームへの選抜

日本代表チームへの選抜された経験は、サッカー選手としての自己を確立し強化する上で、もっとも意味ある転機となっていた。Table 3には、サッカー選手としての自我の芽生えについて、日本代表チームに選抜された際のエピソードを取り上げた。

「学校の先生ならサッカー教えてボール蹴れるし...なんか楽しそうじゃんみたいなどころはあって」 Inf (037) と語り、もともと

サッカーを続けていくために体育教員になりたいと考えていた。大学2年次に予想もなかった日本代表への選抜、卒業後Jリーグの立ち上げに伴うプロ転身など、好機が重なったことに「環境の面でも、ものすごく運に恵まれていた」 Inf (037) としていた。特に、「やっぱり(日本)代表に入ったときとか... (中略)...それが一番大きなきっかけだ」 Inf (038) とし、日本代表チームの一員として選抜されたことが大きな自信にもつなが

Table 3 : 日本代表チームへの選抜についての語り

Int (037):	サッカー選手として生きていこうって思ったのは、いつ頃ですか？
Inf (037):	選手で生きていこうと思ったのは...まあ...大学に入ってからくらいですかね。それまでは...サッカーに携わっていこうと思ったのは小学校の後...5, 6年生くらいから。サッカー楽しくてしょうがないし。それで...学校の先生ならサッカー教えてボール蹴れるし... <u>なんか楽しそうじゃんみたい</u> なところはあって。それで...サッカーとは一生付き合っ生きていたいと思ったんですけど。それが...実際にサッカー選手として生活できるかなって思ったのは大学入ってから。それは、できるんじゃないのかなっていう手応えとか、自信とかをつかめたのが大学に入ってからだったので。それまで日本リーグとかしかなかったんですけど。そこでできる...そこで... (サッカーで) 飯が食えるとは思えなかったし...全然わからなかったし...先のことはわからないっていうのがありましたからね。それに...日本リーグに入ったら、直ぐにJリーグが立ち上がったでしょ...環境の面でも、ものすごく運に恵まれていたんだと思います。
Int (038):	これ (サッカー) でいけるんじゃないっていう手応えやきっかけっていうのはありましたか？
Inf (038):	やっぱり (日本) 代表に入ったときとか...選手として行こうと思った部分は... (日本) 代表...入って、それで、それが一番大きなきっかけだと思いますけどね。選手としてダメでもいいからできるところまで行って。それで、もし選手として成功しなかったら... <u>また...違う道に進めばいい...</u> 体育の先生なら体育の先生に... <u>またなればいよいよ</u> 思っていたっていうこともありますし...はい。
Int (039):	(日本) 代表に初めて選ばれたときっていうのは、選ばれるなあっていう予感めいた感じはありましたか。それとも、まさかっていう感じでしたか？
Inf (039):	いや...もう...全然...まさかもいいところでしたね。ホント、ラッキーって感じで...大学2年の終わる1月、2月のときくらいに初めて入ったので...もう...4月になれば3年だったんですけど。全然...なんの前触れもなく...ただ...お前代表に入ったからみたいな感じでしたから。もう冗談じゃないかな...と思っていましたから俺なんか入っていいの かよって思うくらい...運がいいな、それでホントにいいの...ってそんな感じ でしたけどね。

り、「選手としてダメでもいいからできるところまで行って。それで、もし選手として成功しなかったら...また...違う道に進めばいい...」 Inf (038) と考えるようになった。

また、ここで印象に残るのが、「俺なんか入っていいの**かよって思うくらい...運がいいな、それでホントにいいの...ってそんな感じ**でしたけどね。」 Inf (039) との語りにも、インフォーマントの謙虚な人柄が彷彿されるということである。このインフォーマントの謙虚な人柄は、次のトピックにも読み取ることができた。

4) ポジション・コンバートとライバルの存在

時に、アスリートにとってポジション・コ

ンバートは大きな転機となりうる。Table 4 には、その体験と、彼を取り巻くライバルの存在について語ってもらった。

ここでは、「それ (ポジション・コンバート) がなかったら代表もなかったと思いますし...本当に...サッカーでのそういうキャリアは積めなかったんじゃないかなと思いますね」 Inf (041) と語り、ポジション・コンバートが功を奏し、日本代表にも定着し、サッカー選手としての自己をより一層強化していったことを語った。このことに対して、「それも運だと思いますし」 Inf (041)、「運がいいですね」 Inf (043) としていた。その一方で、「その中で自分は前向きな気持ちでやっていましたけどね。ポジションを変えられたとしても」 Inf (041)、「いや...全

Table 4 : ポジション・コンバートとライバルの存在についての語り

- Int (041) : 選手としては転機ってどんなものがありましたか？
- Inf (041) : あとは...選手としての転機は...ポジションが変わったこともあるんですよね。でも...それは...ユースの代表に選ばれたっていう時に...監督さんにディフェンスになれと言われて...ディフェンスになったのが初めてディフェンスをやったきっかけだったんです。それ(ポジション・コンバート)がなかったら代表もなかったと思いますし...本当に...サッカーでのそういうキャリアは積み重なったんじゃないかなと思いますね。ディフェンスになっていない限り。だから...そういう部分ではポジションの変更で良かったですし...そこから、そうやってユースにそのまま残って、日本代表Bとか、ユニバシアード代表とかに残りながら、その年に本代表(日本代表)になったので、たまたまそういうポジションチェンジ、コンバートが自分の場合はうまくいったんだなっていう感じはしますね。それも...まあ...それも運だと思いますし。ただ...その中で自分は前向きな気持ちでやっていましたけどね。ポジションを変えられたとしても。
- Int (042) : 少しはショックでした？
- Inf (042) : いや...全然...ショックじゃないです。
- Int (043) : どんな感じだったんでしょうか？
- Inf (043) : まあ...どこでもやらしてもらえらるなら。それで...やってみて...駄目で(代表選抜を)落とされたらしょうがないだろうと思ってやっているうちに...そのまま何とか...つかまっていたなと。運がいいですね。はい。
- Int (044) : それまでのポジションは。
- Inf (044) : 中盤とかでしたね。はい。
- Int (045) : 大きな違いっていうか...困ったこととかありませんでしたか？
- Inf (045) : でもやっぱり正反対でしたからね。まあ...ディフェンスやったことなかったですから。ただ、逆の立場で考えて...どういうディフェンスされたら...俺がフォワードのとき嫌だったのかなとか考えたりとか。まあ...ディフェンスの面白いところ...楽しいところっていうのも自分の中でつかみながら...っていうことをうまく感じる事ができたとは思いますが。だから...相手のボールこう来るんじゃないかなとか...そこにボールが思った通り来たり...よめた時っていうのはすごくうれしかったし...してやったりっていう気持ちがあったし...まあ...フォワードの選手っていうのは...相手のチームで特にスター選手っていうのが多くて...そういうスター選手を抑えたときの喜びっていうのは...逆に...ありましたしね。相手のフォワードをうまく...こう...あしらった時であったり...チームとして抑える事ができたときの喜びすごく感じる...感じれるようにもなったし...その辺は...ディフェンスも面白いなっていうように思えるようになったのはよかったですね。だから...そんなに(オフェンスポジションに)すごい拘りはなかったですね。俺は中盤じゃないといやだとか...どこでもいいからやらしてもらえれば。やれって言われたところを...とりあえず一生懸命やってみるといふスタンスだったんで。はい。
- Int (046) : これからはディフェンスで行くぞ! っていう気持ちが固まったのは...そのコンバートしてからそんなに時間はかからなかったですか？
- Inf (046) : そうですね。それは自分で...フォワードだったらきついんじゃないかなと思うところもありましたよね。そんなにスピードあるわけじゃないし...テクニクもすごいわけじゃないし。他の...そうやって...トップレベルの選手...各地方から来ている奴と比べてみても...うん...こいつらの方がうまいよな...速いよなって思うのが多かったんで...そういう中で... (監督に)ディフェンスやれって言われたら...まあ...ここから、一からのスタートだけど...可能性...そっちの方が...やれって言われているんだしたら(やるしかないなっていうのは)あるのかなっていうところはありましたね。
- Int (047) : そのあたり、持ち前の負けん気っていうのが影響していたのでは？

Inf (047): それはもう...すごくありましたよね。はい。だから...やれって言われたらそういうトレーニングも一生懸命やりましたし...大学から一緒になったある選手も...それはユースから一緒になったんですけど...そいつもチームではセンターフォワードだったんだけど...ユース(のチーム)ではストッパーやっていたから...同じような境遇にいる選手だったわけですよ。だから...そういういいライバルとか...仲間とかに恵まれたっていうところはありますよね。はい。それは運命をすごく感じますよね。

Int (048): ライバルっていうのは、ご自分の中でも大きなウエイトを占めている感じですか？

Inf (048): そうですね。他にもそういう選手が何人もいたので...同じときにユースに関わっていたような選手が5人くらい一緒に同じ大学に入りましたから...みんなライバル意識っていうのはありましたし...なおかつ先輩とかもね。そういう全国レベルでもトップの人ばかりでしたから、そういう人たちの良い影響っていうのもあったし...年上の人に恵まれてきたっていうのは...小さな頃からあるんですよ。小学校の頃から、先輩にかわいがられたっていう。はい。だから...自分の学年はすごい人数が少なかったりとか...というのも小学校の時はあったりして...ひとつ上の学年の人たちがすごい面子も揃っていて...そのときにいい成績を出して...自分たちの代の時は...最上級生の時はだめだったんですけど...中学校もそのまま持ち上がりです...そのままひとつ学年が下の時はすごく強くて。それで...3年生の時は...それなりには強かったんですけど...まあ...それは高校に入っても同じ感じで...2年の時は選手権に出て...3年生の時は出れなかったとか...まあ...そんな形で先輩にすごい先輩とか...レベルの高い選手たちがたくさんいて...そういう先輩たちを混ざってやっていたのもあると思うし...かわいがられたっていうのもありますね。大学に入ってもやっぱり上の先輩たちもすごい先輩たちだけで...高校サッカーでは全国に名を轟かせたような選手ばかりでしたから。そういう人たちにかわいがってもらったっていうのもありましたね。社会人になってからも、そういう道を選んでいるのもあるかもしれないんですけど...強いチームとか...レベルの高いところでやりたいとか...自分の気持ちがあたままそういう環境になっているのかもしれないんですけど。(日本リーグの)チームに入ったのも強いところでやりたい...大学でも一緒にやっていた人も多いし...と思って選ぶとそこにすばらしい選手がたくさんいて...そういう人たちにかわいがってもらいながら...自分もレベルをアップしてることができたのかなっていうのもあります。

然...ショックじゃないです」 Inf (042) , 「やれって言われたところを...とりあえず一生懸命やってみるというスタンスだったんで」 Inf (045) という語りからは、彼の謙虚な取り組みを読み取ることができる。

しかし、それは、決して指導者に言われたからやるといった依存度の高いものではなかったようである。「やれって言われているんだったら(やるしかないなっていうのは)あるのかなっていうところはありましたね」

Inf (046) , 「やれって言われたらそういうトレーニングも一生懸命やりましたし」 Inf (047) と語っていることから、与えられた条件ではあったが、それに主体的に順応していったことがうかがわれる。このことは、

「ただ、逆の立場で考えて...どういうディフェンスされたら...俺がフォワードのとき嫌だったのかなとか考えたりとか。まあ...ディフェンスの面白いところ...楽しいところっていうのも自分の中でつかみながら...っていうことをうまく感じる事ができた」 Inf(045) , 「フォワードだったらきついんじゃないかなと思うところもありましたよね。そんなにスピードあるわけじゃないし...テクニックもすごいわけじゃないし。他の...そうやって...トップレベルの選手...各地方から来ている奴と比べてみても...うん...こいつらの方がうまいよな...速いよなって思うのが多かったんで...」 Inf (046) という語りからも首肯できる。

ところで、大きな転機に直面した際に、親しい友人や家族のサポートは大きな対処資源になることはいうまでもない。ここでも、「同じような境遇にいる選手だったわけですよ。だから...そういういいライバルとか...仲間とかに恵まれたっていうところはありますよね」 Inf (047)、「他にもそういう選手が何人もいたので... (中略)...みんなライバル意識っていうのはありましたし...なおかつ先輩とかもね。」 Inf (048) と語っており、同じような境遇にいたライバルの存在がサッカー選手としての自己を支えることに大きく寄与していた。それに加えて、「(先輩に)かわいがってもらいながら...自分もレベルをアップして行くことができたのかなっていうのもあります」 Inf (048) と、人的環境に対して肯定的に認知していたことも確認できる。

5) 怪我の経験

アスリートにとって怪我の経験は様々な意味を有している。怪我を克服し、身体的にも精神的にも成長・成熟を期することもあれば(杉浦, 2001), 重篤な怪我によってそれまでのパフォーマンスに制限を来し、現役引退の直接的な引き金になってしまう場合もある(豊田, 1996)。Table 5 では、インフォーマントの怪我に関連した取り組みや考えについて語ってもらった。

Table 5 にあるように、インフォーマントは、「小学校・中学校はほとんど怪我しなかったですね。高校では...目を一回怪我したくらいで...それ以外は...ほとんど怪我していませんし...大学でもほとんど怪我では休んでいないですね」 Inf (051) と語っており、これまでに深刻な怪我を経験し、それを克服

Table 5 : 怪我の経験についての語り

Int (051): あまり大きな怪我はされていないってことなんですけど、こまごました怪我っていうのは?

Inf (051): そうですね。ああ...怪我は...こまごましたのはありましたけれども...小学校・中学校はほとんど怪我しなかったですね。高校では...目を一回怪我したくらいで...それ以外は...ほとんど怪我していませんし...大学でもほとんど怪我では休んでいないですね。ええ。終わった時に...でも...ああ...休んではいないのか。それで...社会人になって...まあ...こまごまとした...じん帯をちょっと伸ばしたりとか...っていうくらいはありましたけれども。長期離脱は一回もないし...オペ(手術)もないし...って感じですね。はい。

Int (052): 珍しい方ですよ?

Inf (052): そうですね。よく、そう言われますけどね。

Int (053): 怪我の少なさについては、他の選手と違うってところがあるんでしょうか?

Inf (053): ううん。どうなんだろう。他の選手と違うのかどうかわかりませんが...気づいた時にはとにかく、常に100%の集中力をもって...とにかく...全力を出し切るという姿勢ではやっていましたね。それが良かったのかどうかわかりませんが...まあ...その部分で...怪我がなかった自分につながっている部分も少しはあるかなと思いますし...あとは...小さな頃までの時と...社会人になってからの時とでは...また...環境とかも違うし、自分が社会人になった時頃からやっぱりコンディションとか...アフターケアとか...身体の部分のトリートメントもすごく考えるようになりましたし...それまでとか...そんなマッサージとか...全然なかった時代でしたから...はい。だから...そういう部分を...社会人になって結構意識して...身体をケアすることによって選手寿命も長くなるし...怪我ももちろんなくなるっていうところを常に意識はしていたなって思いますよね。はい。

Int (054): ほかの選手で、怪我をして離脱する選手っていますよね。そういうのを近くで見ている、何か感じることはありますか?

Inf (054): 怪我した要因とかは何なんだろうっていうのはありますよね。だから...生活のリズムであったり...ちょっと生活で問題あったんじゃないか...みたいなことに矛先がいたりとか

ね。そういう部分は自分は気をつけなくちゃいけなかったり...どうしようもなく怪我をする場面っていうのもあるとは思いますが...あとは...怪我のそのシチュエーションで...今のプレイで...あそこまで行ったら怪我するでしょっていうところは自分も考えてプレイしなきゃいけないとか...その辺はすごく...こう...行くときと行かないときっていうのがあって...その力の加減であったりとか...そういうのを見極めるっていうか...自分なりに...こう...抜くところを...こう...自然のうちに学んでいたかなっていうのはありますね。それは...まあ...小さい頃からの自然習得だと思うんですけども。やばいって思うときはよけるし...相手の抑えなきゃと思うときは跳ぶし...2人同時にスライディングしたときは足を曲げるしとか...なんかそういう怪我をしそうなシチュエーションでの防御方法みたいなのは...なんか自然と...こう...身につけていたり...一瞬間の間合いとか...呼吸みたいなものをちょっと変えることで...それを...それで...怪我を防げているってことが多いのかなと思います。はい。

してきたとは語らなかつた。その反面、怪我への対応を語る中には、インフォーマントが第一線で長く活躍できたエッセンスを読み取ることができる。「とにかく常に100%の集中力をもって...とにかく...全力を出し切るという姿勢ではやっていましたね」 Inf (053) と、常に全力で取り組んでいくことで、怪我を回避することができたと捉えていた。ひいては、そのことが「選手寿命も長くなる...」 Inf (053) ことにつながったとしていた。また、「そういう部分は自分は気をつけなくちゃいけなかったり... (中略) ...行くときと行かないときっていうのがあって...その力の加減であったりとか...そういうのを見極めるっていうか...自分なりに... (中略) ...自然のうちに学んでいたかなっていうのはありますね」 Inf (054) という語りからは、周囲の怪我の状況を眺めることで自己の取り組みにも役立てていたことがうかがえる。そして、「コンディションとか...アフターケアとか...身体の部分のトリートメントもすごく考えるように」 Inf (053) していたことは、アスリートとしての自己が強化されてきた表れでもあり、彼に「常に100%の集中力をもって全力を出し切る」というアスリートとしての信念があったことを強く印象づける。

ちなみに、ここでいう信念 (belief) とは、個人の経験や学習を通じて獲得された知的な行動決定傾向を意味し、新しい事態に当面し

たとき、個人の安定性を確保するような仕方で行動を規定することが予測される。本インフォーマントの場合、「常に100%の集中力をもって全力を出し切る」というアスリートとしての信念を強く持つことで、怪我への予防的な取り組みを強化していたと読み取れる。

6) 競技引退

特に、現役中に引退後のセカンドキャリアについての見通しを具現化できるアスリートは皆無に等しい。このことは、欧米諸国を中心に発展してきたキャリアトランジション支援プロジェクトを概観しても容易に確認できる (豊田, 2000)。インフォーマントも、引退に直面するまでの間に、引退後の生活についての具体的な展望はなかったとしたが、その背景には現役続行と競技引退の間で揺れる葛藤があったと語った (Table 6)。

競技引退を実際に自身のリアリティとして受け入れ始めたのが、「頭に浮かびだしたのは...そうですね...ううん...引退する1, 2年前ですかね」 Inf (055) としていた。そして、「移籍であったり...あとはチームの中での自分の状況であったり...あとはプレイの... (中略) ...イメージと大分違うなどが...体力的にも...今までこうじゃなかったのになとか...そういうのが...どんだんいっぱい出てきますから... (中略) ...それに代えて何かを別のプラスアルファを見つけて...両方の割合

Table 6 : 競技引退についての語り

Int (055) : 引退のことを考え始めたのはいつごろになりますか？

Inf (055) : 頭に浮かびだしたのは...そうですね...うん...引退する1, 2年前ですかね。はい。

Int (056) : 何かきっかけというのはありましたか？

Inf (056) : やっぱり...そういう...移籍であったり...あとはチームの中での自分の状況であったり...あとはプレイの...自分のプレイを自分で感じるどころ...自分の身体で...若い頃とは変わってくるところはたくさんあると思うので。そういうプレイを自分で感じて...イメージと大分違うなどが...体力的にも...今までこうじゃなかったのになどか...そういうのが...どんどんいっぱい出てきますから...もう...日がたつにつれて増えていくわけで...その中で...それに代えて何かを別のプラスアルファを見つけて...両方の割合をキャラにしていっていうことを心がけてやっていたんですけど...うん...その辺がやっぱり徐々に減っていく割合の方が多くなってきたりすると...そろそろかなって思うようにもなりますし...あとは周りから必然とそういう状況になっていくっていうこともありますよね。ああもうチームがないとか...その時に...今最終的な決断はそういう方面にあるわけで...まだ来てくれ...まだやれるっていうチームがあれば...呼んでくれるチームがあれば...俺はまだできるのかなっていう...だから...気持ちの部分のウエイトが大きかったとは思いますが。あと...それに...結局...身体がどうなのかっていう...どっちのバランスがっていう部分はあると思いますけど...やっぱり...身体がそういうところを感じたら...気持ちも...ああもう辞めようかなっていう方向に...大きく傾いてしまうと思うし...最終的には気持ちなのかなっていうところはありますよね。

Int (057) : 引退がなって思って1, 2年経っていますよね。その間、自分の中で葛藤とかはありましたか？

Inf (057) : そうですね。まあ...葛藤っていうのは...結局...ホントに引退する半年前くらいからですね。そのチームではもう来年はない...っていうことは夏くらいからわかっていたので...その時はどうするかっていうところで...自分との戦いがあった。例えば...新たな気持ち...もう一度やろうと思うのか...それとも...もうそろそろと思うのかっていう戦いがありましたけれどね。はい。それまでは...やるチームは現にあったわけで...もう一年契約を更新してくれっていう話になっていけば...全然...やっていたと思うんですけど。そしたら...そういう状況に置かれるだけで...気持ちもまだやれるんだっていう気持ちになれるわけですけど...そういうふうでなかったんで...そういう部分がないのに...まだやれるんだっていう強い気持ちが持てるかどうかってところでの...逆に弱い部分のウエイトが大きくなっていて...じゃあ辞めようかなったんだろうと思います。だから...その...葛藤も戦いもあったし...最後の最後まで...どっかほかのチーム探して...ええ...まだやれるんじゃないのっていう声もあったし...周りの人のそういう声っていうのも影響は少しはしましたよね。もう...でも...どんなに誰に聞いても...ね...やっぱり...その人の考えなのでね。ポロポロになるまでやった方がいいよっていう人もいれば...そろそろなんじゃないっていう人もいますし...そういうところで最終的には自分で...戦いの中で決断をしなければいけなかったんですけど...まあ...ただ...今となっちはいいタイミングだったんじゃないかと思うし...身体的にもすごくきつかったことも確かだし...もう限界まで来ていたのかなって感じはしますけどね。

Int (058) : 引退する前に、引退後の生活面で心配することはありましたか？

Inf (058) : ああそうですね。まあ...引退してから自分は何しようかっていう部分は現役の時は考えないものなんです。ね。引退してからのことなんて...現役で考えんなよって感じになっちゃうので...ホントに引退って決めてから...おおどうしようっていう焦りはありましたよね。だから...それまでは...ほとんどなかったんですけど...だから...改めてそういう立場におかれてから...自分が何かこう...やんなきゃならないんだ...もっと勉強して指導者を目指す

んであれば...指導者の勉強しなくちゃいけないっていう...そういう立場に置かれて...初めて入って動き出すんだなあとか...強い気持ちでまた何かを始めれるんだなっていうのは感じましたね。はい。

Int (059): 新しい取り組みで...こういうことしたいなっていうのは...辞めた決意を下した頃に浮かびましたか?

Inf (059): 新しい取り組み。そうですね、まあ...まず...新しい取り組みではないと思うんですけど...ただ...自分が現役でグラウンドでやっているのと...まあ...将来的には指導者を目指そうっていうのは現役の時からも...せっかくここまでサッカーやってきたんだから...俺はサッカー関係で...今度は...また指導者としてピッチに帰ってきたいなと...現場がやっぱり好きだし...っていう部分は持っていたので...ただ...選手としてグラウンドにいるのと...指導者としてグラウンドにいるのと...全然違うから...やっぱりそっちの指導者の勉強をしっかりとしなきゃいけない...それは...まあ新しいスタートになると思っていましたし...全然違うから...そういう部分は...あの...引退してから考えましたし...その指導者がらみなのかもしいんですけど...サッカーを外からいろんな角度で見たいなっていうのはすごく感じましたよね。今までずっと自分は現役のためにコンディションを調整して...いろんなものをゆっくりとね...ええ...こう...自分の好きなこともできなかったし...余裕を持った生活っていうのは送れなかったの...ええ...そういう時期に当ててもいいのかなっていうふうには...引退を決めてから考えましたね。1年間くらいは...ちょっとゆっくり...今までもう突っ走ってきた部分もあるから。

Int (060): ゆっくりしたいなっていう感じでしょうか?

Inf (060): そうですね。そういうのはありましたね。

Int (061): 引退されて時間はどれくらい経っていますか?

Inf (061): うんと... 月 日ぐらいに正式に...引退して1年弱...まだ経ってないですね。

Int (063): 1年経ってないですけど...約1年くらいですよ。どんな生活ですか。

Inf (063): いや...現役のときのほうがよかったですね。ははは。ゆっくりできないですね。やっぱりね。大変ですね。はい。みんな現役が一番っていうけど...それが...やっぱりそれはホントだなと思いますよね。

Int (064): お忙しいのは...いろんなことを学んだりすることが多いってことでしょうか?

Inf (064): ああ...そうですね。だから...ゼロからのスタートだし...ええ...選手としてのキャリアっていうものと...指導者としてのキャリアは全然別物だし...指導者としてのキャリアはもう...たくさんの方がそれだけのもう進んでいる人はいるわけで...そういう人たちを...僕は追いかけてやって...これからやっていかなきゃならないと思うし...その...部分っていうのは...少しでも早く...勉強して埋めていかなきゃいけないのかなっていうのは感じますよね。

をキャラにしていってということに心がけてやっていたんですけど... (中略)...そろそろかなって思うようにもなりますし」 Inf (056) にみられるように、移籍経験やチーム内での役割の変化、競技力・体力の低下をきっかけとして徐々に競技引退を自己のリアリティとして受け入れていったようである。

その一方で、現役続行と競技引退の間での葛藤を「新たな気持ち...もう一度やろうと思うのか...それとも...もうそろそろ思うのか...という戦いがありましたけれどね」 Inf

(057) と表現していた。そこでは、「まだやれるっていうチームがあれば...呼んでくれるチームがあれば...俺はまだできるのかなっていう...」 Inf (056) と現役への未練を語り、「今となっちはいいタイミングだったんじゃないかと思うし...身体的にもすごくきつかったことも確かだし...もう限界まで来ていたのかなっていう感じはしますけどね」 Inf (057) といったある種の限界感も拭えずにいた。

ところで、現役アスリートたちの“引退す

ることなんて考えるな”，“現役に拘れ”，“競技以外のことは考えるな”，“今の競技生活に埋没しろ”といった風潮を拭い去ることはできない（豊田，2001）。インフォーマントも「引退してからのことなんて...現役で考えんなよって感じになっちゃうんで...ホントに引退って決めてから...おっどうしようっていう焦りはありましたよね。だから...それまでは...ほとんどなかったですけど...だから...改めてそういう立場におかれてから...自分が何かこう...やんなきゃならないんだ」 Inf (058) と、引退に直面して初めて次のキャリアを確立していくことに不安を感じたという。そして、サッカー選手ではない新しい自分づくりに関連して、「せっかくここまでサッカーやってきたんだから...俺はサッカー関係で...今度は...また指導者としてピッチに帰ってきたいなと...（中略）...そういう部分は...あの...引退してから考えましたし...」 Inf (059) と、指導者としての自分づくりへ移行していることがうかがえた。

ちなみに、アスリートとしての自分から新しい自分への移行する際、アスリートは、ある程度の期間、虚脱や空白の時間を作りたがる。アスリートとしてトレーニングや練習、試合に対して心身共に多大な投資をしてきたことから、引退を迎えるとしばらくの間“ホッとしたい”“ゆっくりしたい”と誰もが語る（豊田，2001）。インフォーマントにも「今までずっと...（中略）...自分の好きなこともできなかったし...余裕を持った生活っていうのは送れなかったんで...（中略）...1年間くらいは...ちょっとゆっくり...今までもう突っ走ってきた部分もあるから」 Inf (059) と語っていた。もしかすると、そこにみられる虚脱や空白は、新しい自分づくりに必要な時間であって、スムーズな移行ばかりを善しとしてはならないのかもしれない。その一方で、「いや...現役のときのほうがよかったですね。ははは。ゆっくりできないですね。やっぱりね。大変ですね。はい。みんな現役が

一番っていうけど...それが...やっぱりそれはホントだなと思いますよね。」 Inf (063) と語り、競技生活から新しい生活への移行に直面してある程度の困難さを訴えていた。

引退後の取り組みに関しては、「ゼロからのスタートだし...ええ...選手としてのキャリアっていうものと...指導者としてのキャリアは全然別物だし...指導者としてのキャリアはもう...たくさんの方がそれだけのもう進んでいる人はいるわけで...そういう人たちを...僕らは追いかけてやって...これからやっていかなきゃならないと思うし...その...部分っていうのは...少しでも早く...勉強して埋めていかなきゃいけないのかなっていうのは感じますよね」 Inf (064) と、指導者としてのセカンドキャリア開発へ向けて積極的に取り組もうとしていることがうかがわれた。

これらの語りを、Figure 1 に示すアスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化プロセスに当てはめて捉えてみると、移籍体験や役割変化を経験していく中で競技力・体力の低下を自己のリアリティとして認知するようになり、これをきっかけ（社会化予期）とした新たな自分づくりの最中にあることが確認できる。

まとめ

元トップアスリートが転機をどのように語るのか、といった本研究の関心事は、以下のような特徴を導き出すことで解決される。概ね、インフォーマントの語りには、謙虚な人柄が映し出されていた。

特に、1) サッカーを始めたきっかけ、2) サッカー選手としての自分、3) 日本代表チームへの選抜、4) ポジション・コンバートやライバルの存在、についての語りの中に「運に恵まれていた」という言葉が繰り返されていたことが印象に残った。そして、これらの「運に恵まれていた」とするエピソードには、彼をトップアスリートにならしめる上で、偶然（運）とするよりは必然とならしめ

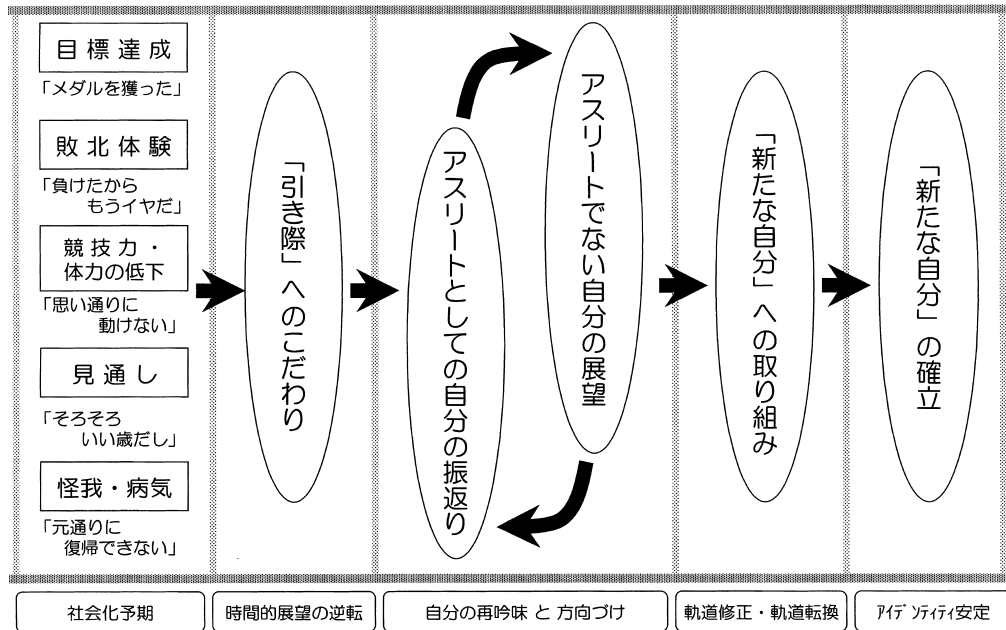


Figure 1 : 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化プロセス (豊田・中込(2000)をもとに作成)

るだけの主体性を読み取ることができた。すなわち、「運に恵まれていた」とする彼の謙虚な捉え方が、転機によって微妙に変化する物的・人的環境への肯定的な認知を促しており、トップアスリートとしての自己を維持するための様々な課題を主体的に達成していくことを可能とならしめたことを印象づけた。

次に、5) 怪我の経験について尋ねたところ、彼は深刻な怪我の経験が少なく、その一方では周囲の怪我の様子をみてコンディショニングやアフターケアなどへの意識を強めていたことを語った。そして、このことがトップアスリートとしての自己を強化し、選手生命を長くせしめたともしていた。このように、トップアスリートとしての自己にとって脅威となるべき怪我に対して予防的な取り組んでいた背景には、「常に100%の集中力をもって全力を出し切る」というアスリートとしての信念が盛り込まれていたと読み取れた。

そして、6) 現役引退については、直面して初めてアスリートではなくなるリアリティを実感しており、現役続行への未練との間で

揺れる葛藤と第二の人生への移行の不安を語った。この点からすると、インフォーマントにとって競技引退が、アイデンティティの崩し(アスリートとしての自分の解体)と組み換え(指導者としての自分の構築)を迫る危機となっていたことは相違ない。しかし、この困難を伴う転機に際して、彼の「行き先」は明確に見据えられていた。すなわち、現役当時から胸に温めていた「指導者になる」という目標の実現のために、積極的に取り組む毎日を送っていたのである。このように眺めると、インフォーマントの様々な転機についての語りは、指導者としての自分を目標とし、これを主体的に構築しようとする現在との照合から生じた語りかもしれない。ここでも、彼のサッカーへの取り組みを通じて獲得した謙虚な人柄が印象づけられた。

これらのことから、本研究から導き出される発展継承の望まれる仮説としては、元トップアスリートにとっての転機は、(1) 物的・人的環境への主体的な働きかけ、(2) アスリートとしての信条の投影、(3) 現在の目標と

の照合，によって意味ある体験として語られる，ということが挙げられる。

最後に，本研究で確認されたプロットは，固定されたものではなく，今後も個人の置かれている環境への働きかけによって変わりうるものと予測できる。その変化を語り直しによって確認していくことが，個人にとっての転機の意味を包括的に理解することにつながるかと著者は考えている。中込（1998）は，個から普遍なるものを論じることのできるアプローチとして単一事例の継続研究の重要性を訴えている。著者も語りを方法として，個の存在を重要視しつつ，自己物語の蓄積を図っていきたいと考えている。そうすることで，個の内面へより一層接近できるのではないだろうか。

引用文献

- 榎本博明 1999 私 の心理学的探求 有斐閣選書
- 榎本博明 2002 ほんとうの自分 の作り方 講談社現代新書
- レビンソン：南博訳 1992 ライフサイクルの心理学（上・下）講談社学術文庫 Levinson, D. J. 1978 The seasons of a man's life. The Starling Lord Agency : New York
- 森岡正芳 2002 自己の物語 梶田叡一（編）自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版 29-44.
- 中込四郎 1998 「臨床スポーツ心理学」の方法 スポーツ心理学研究 第25巻：30-39.
- 佐藤浩一 1998 「自伝的記憶」研究に求められる視点 群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編）第47巻：599-618.
- 杉浦健 2001 スポーツ選手としての心理的成熟理論についての実証的研究 体育学研究 第46巻：337-351.
- 高橋雅延 2000 記憶と自己 太田信夫・多鹿秀継（編著）記憶研究の最前線 北大路書房：229-246.
- 豊田則成 1999 アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究—中年期危機を体験した元オリンピック選手— スポーツ教育学研究 第19巻：117-129.
- 豊田則成 2001 競技引退に伴う心理的問題と対策 体育の科学 第51巻：368-373.
- 豊田則成・中込四郎 1996 運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐって 体育学研究 第41巻：192-206.
- 豊田則成・中込四郎 2000 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討 体育学研究 第45巻：315-332.
- やまだようこ 2000 人生を物語ることの意味 やまだようこ（編著）人生を物語る—生成のライフストーリー— ミネルヴァ書房：1-38.

【附記】本研究は（財）日本サッカー協会U6キッズ・プロモーションの研究活動の一環として実施された。